

村落社会研究の現段階における問題

——二・三のプロブレマティク——

報告者 似田 貝 香 門

報告

似田貝 研究会案内では「戦前・戦後における村落研究——その連関をめぐって」ということになっていますが、連関については特定のテーマで切ってゆかねばなりませんし、戦前と戦後との間にはある種の方法的断層があつて接合しにくいということもあり、今日はタイトルをかえまして「村落社会研究の現段階における問題」ということで、現在の問題からみて現在なお理論的に整備されていないいくつかの重要な問題点について報告したい。

レジメのA問題設定Vに書きましたが現段階で問題とされている「農業問題」の集約的テーマは「農民層分解論」だがこの凝縮のうちには多様な問題視角がふくまれ、またその下にいくつかの系論がある。これらの系論と分解論との関連を問題としてみたい。その場合、現状にかかわる問題と、展望論、変革論の問題にわけ、それぞれについて共同体の問題を媒介に考えてみたい。ただ展望論には多くの問題があり、今日の報告は現状論が骨子になる。

A現状論Vの問題は村落社会把握の問題ですが、昨年の村研大会の議論に対する反省会（第一回研究会をさす）で小池から村落の意

味が十分議論されなかつたのではないかとの批判もあったが、そのような、現在、村落をどうとらえるかの問題です。

村落構造、村落社会の変化という問題を論ずる場合、常に議論されるのがこれらの規定の問題で、「ムラ」とか「共同体」をどう規定するか（この「ムラ」と「共同体」は等置されるものではないこと、両者は異つた方法からみられたものでないかという点に注意）の問題があるが共同体の問題と農民層の問題で言えば昭和三十年以降問題視角の移行がみられる。「共同体の解体」↓「農民層分解」とストリートに移行する動きと、ほど同時期に、「共同体解体」をすでに前提においての分解論、その場合ムラや共同体の再編成論ともいうべきものが現われ、もう一つは農民層の正常な分解を阻止する要因として共同体が問題とされる。たとえば「ムラは高地価、低労賃のメカニズムのなかで生きており」（細谷）といわれる場合、

農業の新しい展開を阻む要因として考えられているのではないか。「再編論」と「阻止要因論」との両者は当然展望論で相違をみせるし、実際にはこの両者の中間に種々の見解があるうが、かかる相違は「近代化論」と「近代化批判論」における共同体の問題のしかたの相違にもあらわれてくるだろう。

三十年以降の問題視角の変化の中で、いくつかの研究史の系譜があるがこの状況の中で三十年以降イエの解体、ムラの解体が問題とされてきた。その場合、イエの解体からムラの解体への方向の理解とムラの解体からイエの解体を問題とする仕方と、二つの流れがあったのではないか。両者は論理構成が逆だがこれを検討するとイエと共同体及至ムラとでは段階的な差異があったのではないか。封建的共同体の解体によって分割地的土地所有・分割地農民が成立しそれが両極分解するという径路を理論的前提とするイエ解体→ムラ解体にせよ、共同体解体→イエ解体にせよ、そこに段階的な差がしのびこんでくる。いずれにせよ、イエとムラ、共同体との内的連繫の問題がそこにあり、いわゆる解体論のなかにも、このような意味でのイエや共同体の規定についてはかなり問題点が多く含まれていたと思われる。イエ・ムラ・共同体相互の論理的内的連繫にはあいまいさがあった。家連合論と共同体論が現実分析では結びついているが、論理構造としてどう結びついているかはアイマイであった。ここでは論理構成をもちばら問題として村落社会規定の問題を明確にする突破口としてみたい。

まず「所有」と「社会関係」の関連。ここでまず次のような点を限定条件として注意しておきたい。一つはあくまでも理論的な立場から問題にしているということ、第二に典型的には封建的共同体を

れ以降への過程を検討の出発点としていふことである。ところで「所有」と「社会関係」というと通俗的な理解では前者が経済学的接近、後者が社会学的接近とされるようだが、私は後述の如く「所有」を問題にすることは必ずしも経済学的接近に限ったことではないと考える。そこで共同体を共同体たらしめるものとしては共同体的所有或いは共同体的占取が指摘され、その存在と発現形態が問題とされ、共同体における固有の二元性（マルクス）の問題がとりあげられてきた。この二元性は所有について言われているが、その意味を

Jones 或いは平田清明の研究のなからあきらかにしておくべき。A所有 *Beibehaltung* 範疇の意義 V ということですがマルクスはこれを獲得行為の意味から問題としそこに論理的には三つのモメントを見ている。第一に自分のものとして自然的生産条件に対する人間的働きかけ（II 関係行為 *Verhalten*）第二にこの生産活動において取り結ぶ人間相互の関係行為、第三に社会を構成して生産する人間のみ固有に発生する意識における自他の区別の意識行為たる関係行為、この三つで、これらが所有のなかに含まれている。このような意味で所有範疇は必ずしも狭い意味での経済学的概念とのみ言えない。その点でたとえばつぎのような指摘に注目しておきたい。細谷は「土地所有とはたんに人間と土地との関係をあらわすのではなく、人間と人間との関係、つまり一定の歴史的な階級関係を意味する」（『村落社会研究』第四集一五八頁）といい、安原はこの細谷の論点と関連して、マルクスの「経済学批判」の意味から「所有」のもつ問題を立論しようとしている（『村落社会研究』第五集二四五頁）。これらはいずれも所有イコールせまい意味での経済学の問題として考えていない。

これを具体的に考えてみると、さし当り農業生産活動における労働（あるいは共同労働）のありかたが問題となろう。共同体規定の一つの中心も労働ないし生産の共同にあった。しかし単に一般的意味での共同でなく、共同体に固有に含まれている所有の二元性のなかで、それぞれの所有形態のなかで表現される労働の共同性が問題である。たとえば共同占取にもとづく共同労働と私的占取の根源となる個別的労働とは範疇的に異なるのでこれを基礎として生じる社会関係・共同関係の範疇的差異が出てくる。このように所有の形態とそれにもとづく共同労働のありかたとの関連のなかに特有の社会関係の構成なり形成契機がふくまれているわけで、この点を具体的に社会関係、集団形成という点で見てゆくと、マルクスの所有の二元性とM・ウェーバーの *Verbandschaftung und Vergemeinschaftung*、ゲマインシャフト関係とゲゼルンヤフト関係が、それぞれの共同占取、それにもとづく共同労働を基礎とする社会関係と、私的占取私的労働により結ばれる社会関係と、それぞれの社会関係の形成契機が異なるものとして与えられることとなり、かく理解するとマルクスにおける二元性と、社会関係ないし集団形成の形成契機から立てられたウェーバーの両概念との間に理論的接合の可能性が聞かれるのではなからうか。

つきに以上を前提として共同体の構造分析の論理構成をどう考えればよいか。これまでの共同体ないしムラの研究のなかで、共同体とそれを構成する成員——イエといったり経営といったりしてきているが、それがどこから出発して共同体を問題としたか、逆にどこから出発してイエを問題としたか。実体論では共同体を分析してそのなかで身分関係、同族関係などが指摘されてきたが、論理構成と

してみると共同体の出発点はアイマイであった。問題提起は行われてきたが。たとえば田原（音和）は村研年報五集の研究動向の中で共同体と村落共同体を構成する生活共同体としての同族結合はいかなる必然性をもって連関をもちともに村落共同体を構成し得るか、その場合の両者の論理的必然性をあきらかにする必要を指摘している。イエとか経営から出発した議論と共同体そのものから出発した問題とをどう論理的に一貫して説明してきたかがアイマイであった。そこで最初に論理の出発点としての基礎範疇の設定、ヘーゲル流に言えば *Anfang* を問題にしなければならぬ。「抽象的なものから具体的なものに向上する方法」で、しかも「多くの諸規定の総括であり、したがって多様なものの統一」（マルクス「経済学批判序説」字高訳三四六〜三五〇頁参照）である論理的起点たる「基礎範疇」の設定。たとえば資本主義における起点は、人と人との関係の物象化↓商品範疇↓価値範疇が設定される。これに対し封建社会、或いは農業が資本主義的に展開されていない段階では、人と人との関係は「経営」の側面から分析されるべきではないか。資本主義における基礎範疇の設定については「資本論」第一章に展開されているが、このような基礎範疇の設定は種々行われている。たとえば大家久雄では共同体につき成員のありかたから出発し、また史的唯物論における「生産様式の基本形態」はその基本範疇である。この点ではさらに *Grundrisse* における *Formen* の位置に注目しておきたい。そこに基本範疇における諸共同体と近代市民社会、資本制社会との論理的歴史的対比が示される。資本制社会では商品範疇、ないし資本家的経営が基本範疇で、これに対し *Formen* の中には大要次のような指摘が見られる——「勤労主体の生産諸力

の一定の発展段階……彼らがそのうちに組織されているところの共同組織 Gamelings 等と、それに基礎づけられた財産との崩壊の原因は、結局そこそこそ（勤労諸主体をさす一似田具）存在する」（飯田訳四六―八頁）このような勤労主体としての経営、この経営を出発点として考える。

共同体はその成員である経営相互の関係であり、経営を出発点とする限り、基本経営の特定の形態に対応して共同体のありかたが定まる——論理的構成として。共同体の再生産における共同体固有の二元性は経営のなかの二元性としてあらわれ、所有の二元性が一つの経営のなかにくまれている。と同時にそれぞれの所有が、労働過程のなかでの社会関係に相違をもたらしつつ、統一的に存在し、つまりかかる意味で、生産関係と生産力との統一が経営のなかに存在している。このような経営内部の問題から共同体の問題へ展開しなければならぬが、これはまだ抽象的で、かかる関連を具体化するためにヴィジブルな現象として労働過程の分析が必要となる。それについては山田舜や福島大学グループの研究成果が参考となる。山田は労働過程を「基本的行程（全労働過程を規定する）」と「派生的行程」に区分している（山田舜「日本封建制の構造分析」一四―五頁、同「蚕種生産における半封建的経営」―高橋・古島編「農業の発達と地主制」二〇七―八頁。なお労働過程は複合労働過程である）。一つの単純な労働過程を前提してみよう。水稲における播種から刈取までの労働過程には、基本的行程と派生的行程との両者が複雑に入りこんでいる——播種とか耕地の再生産とか。その労働行程のほかに種々の共同労働がある。基本的行程における共同労働もあれば派生的行程における共同労働もある。それぞれの労働行

程のなかに、いかなる所有がふくまれているのかが問題であり、等しく共同労働といってもそれが基本的行程にかかわるものか、派生的行程にかかわるものかの区別・相違が問題とさるべきである。たとえば A・U・V についてみよう。それは、それ自体は一つの共同労働のある特殊な性格のなかでの一般的なものをさしているようだがそれが基本的行程に属するか、派生的行程に属するかで、その持つ意味が異ってくる。また、社会的生産力の発展はどちらの行程が起点となって生じるのか、の問題もある。農業生産力の発展といってもそれは農業労働力のどの部分が変わるかが問題である。このような検討を仔細に行うことによって、有賀喜左エ門の研究をどう位置づけるかの問題もかなりスッキリしてくると思う。この点は村研年報所載の小稿を参照して戴きたい。

家連合論（同族論）は、イエのありかたから、イエ・イエの共同関係を問題としてきたが、かかる問題設定の仕方は、論理的設定の仕方としては経営から共同体及至ムラを問題としてゆくという論理構成と同様で、このような分析の方向はかなり重要だと思ふ。しかしこのような分析視角が、共同体論が登場してから無視されてきたのではないか。そのため家連合論と共同体論が論理構成として結びつかなかったのだ、このような経営から共同体への論理構成をとれば家連合論の論理構成と足並みが揃うのではないかと思ふ。もっともこれらにはもっぱら論理構成を問題としていたので、農業生産構造のなかでみてイエ連合が基本的労働行程や共同体的所有のなかで大きな意味をもっているということとは別問題である。この点は遠見・河村論文（「思想」所載）で扱われているが、そこではある種の実体論から同族論を切ってしまうので、論理構成としての整

理は完結していない（共同体をあまり問題としていないことと関連するだろうが）。

ところで、イエから共同体への論理構成、あるいは経営から共同体への論理ではムラと共同体とのズレが当然出てこざるを得ない。家連合の外枠としてのムラ、ということになるからだ。ところが共同体論の場合、ムラをどのように問題にし得るのか。経営における生産力の発展のなかで生産関係として働く共同関係が生活関係として残ってくる——生活関係化ないし地縁的関係化の領域が共同体の上の方に考えられることになるのだろうか。このような意味でのムラと家連合としてのムラとを等置し得るか否かにはかなり問題がある。

有賀の家連合論には、類型としての「同族結合」と「組結合」の「相互転換論」がある。これには「変化があつて変動がない」などの批判もあり、有賀の類型設定に対する誤解もかなりあると思う。この「転換」は生産関係や生産活動のなかで同族結合が大きな意味をもつていて、村落の場合、基本的或いは派生的労働行程の変化のなかで同族や組の結合の変化として現われるのは当然で、共同関係が変ってくる。共同労働が生産力の発展のなかで変化する側面としては限定的に重要である。

さらにまた、生産関係の側面の家連合論を限定する場合、共同体の問題がどのようにひろがるかができるのか。家連合論は本来ひろい意味での生活（それは有賀の場合哲学的内容をもふくんでいるようだが）を問題としているが、それが生産関係、労働過程のなかで大きな意味をもっている場合、家連合論、同族論は共同労働のありかたの検討を通じて共同体に關する世界史的比定のなかの位置づ

けを可能としよう。（この意味で住谷の如く同族論をキンシップ・システムとしてとらえるのは比較基準をひろげすぎる感をもつ。）なおこれらの論点の詳細については村研年報所載論文を参照されたい。

最後に鈴木栄太郎の自然村論に論及しなければならぬがそれは後に展望論でふれるとして、さしあたり以上の検討から明らかにし得る問題点を羅列的にふれておきたい。

共同体とムラの問題。それぞれ、生産と、生活から規定されてくるので、異なったものとして指定されてくる。この点、たとえば△煙山村調査▽では共同関係がある意味で一般的に扱われ、共同関係の諸契機はあげられているが、それぞれについての所有にもとづく吟味が無いし、共同労働が基本的行程のものか、派生的行程のものか、についても同様である。共同体とムラとの関係については、かつて福武直が共同体規制と地域社会的拘束とを区別したが、これほかなり重要な指摘ではなかったか。また、同族団論と共同体論を問題とする場合、そして近代日本村落の原型を問題とする場合、かなり重要な視点を与えるだろう。ムラの解体、共同体の解体という場合、寄生地主制下の村落での共同体及至家連合とそれ以降の村落の在り方をみると、当然、共同関係における家連合の意味が異ってくる。そこで共同体における共同関係として何が残るか、基本行程との関連での検討が重要であり、さらに昭和三十年以降のムラの解体、共同体の解体が言われるなかで、共同労働の意図が問われねばならぬだろう——当然この場合農地改革の評価が重要な問題であるが、自給性と共同体という問題についても基本行程での共同労働と所有との関係を明確にすることが必要で、ある発現形態だけを問題

にしても共同体といえるかどうか問題である。農業経営の近代化、合理化と言われる場合、労働過程のどの部分が合理化されるのか、基本的行程か、派生的行程かの相違が問題となり、それに応じてムラの性格変化の意味が異なるだろう。

△展望論V以上を現状論として次に展望論に入りたいが、ここはまだ十分整理されておらず、いわば願望に近いことになるだろうが、さし当りこうした問題を考えるべきではないかということ述べておきたい。

展望でまず問題となるのは農業変革である。農民層分解と農業変革は当然結びついているわけだが、激動期の農業、農村分析からひき出された諸命題を理論的、歴史的に検討して農業変革の途をひらくといわれるがそこにいくつかの問題点がある。一つは変革主体論ともいうべき問題である。農民層分解のなかで上昇あるいは下降の種々の動きが見られるがいずれにせよ零細私土地所有の矛盾が指摘され、その克服のための主体の変革が、意識変革も含め、いわば運動論として出されてくる。この場合、農業変革の担い手の想定からの立論はむしろ正しいが、変革主体性のみを頼ると展望はうすいのではないか、たとえば一九三〇年代の山田盛太郎の「日本資本主義分析」では最後に「労働力」のカテゴリ、変革の主体的カテゴリを問題とし興味深いのがそのさきについては出されていない。展開が欠如していたのではないか。それが戦後の農地改革の中での変革論、運動論を具体的にかちとれなくさせたこともあり、それは変革主体性論に頼っていたからではないか——実感としてそう感じる。もう一つは土地変革論がある。四三年の土地制度史学会で零細地片の私土地所有からの脱却が問題とされた。そこで土地国有化

論にむけての諸段階を確立してゆく方向を見出すことが必要だとされた。農民にはかなり実現不可能のような心理的影響があるだろうが、土地所有の国有化論の立論は立てられてしかるべきであると思う。戦後、農地改革過程のなかで旧秩序変革のためではあるが土地国有論或いは社会化（福武）などの展望論が出された。変革主体論からは歴史の複線的可能性がヴィジブルに出されるので、その場合の土地変革論と、客観的に可能な土地変革論が必要ではないか。この点後進国資本主義のなかで、ドイツ、ロシアなどで同様の問題が提起されてきたことを想起したい。変革主体論ないし運動論レベルで考えるべきことは多いが、土地国有化と関連して、生産力の担い手のエートスが問題となるわけで、国有化論の場合、その担い手としての変革論が欠如してきたのではないかと思う。

また、展望の場合、ムラ、共同体をどう措定するのかが当面大きな問題で、共同体的諸関係のなかで問題をたてるのか、またかつて旧ロシアで問題とされたような、ミール・共同体を逆転して社会主義所有へゆくのか、いずれにせよ現在の共同体の意味が確定されることによって変革論が展開されてくる。

最後に寄生地主制以降の村落構成あるいは共同体、ムラをどのように理解するかにふれておきたい。農民層分解についてもある種の原型が一九三〇年代に見られるといわれる（大内力）が古典的帝国主義から国家独占資本主義への変化と関連して、一九三〇年代の村落に注目しておく必要があるのではないか。その意味で鈴木栄太郎の自然村落の意義についても批判的な検討が必要だ。鈴木は、一九三〇年代の農村——山田盛太郎のいう「型の解体」の時期——、農村の解体とよばれる状況の中で、農村の危機から問題を提起してい

った。共同体の視点から自然村を照射してみるとかなり大きな問題が出てくる。何が解体しつつあるのかを明確にするために、原型として理念的に設定されたのが自然村で、この自然村設定の問題意識が注目されるべきであろう。その意味で私は『日本農村社会学原理』の第九章を重視したい。それには鈴木の実践的視点から農業イコール農村問題として提出された、変革論（土地所有ないし生産関係の問題はぬけているが）な だが、村落の解体——上からの近代化に対する強烈な批判がみられる。農業計画が上から出されるに対し農村の問題としてこれを提起すべきだとし、共同労働関係の地域的範疇が具体的に無いのの上からおろされてくるような、自然村の実体为上から規定されてくるような、上からの農業計画に反撥し、共同労働関係の地域的範疇が重要だということを実践的観点から執拗に問題にしている。一九三〇年代、農村解体過程のなかで、歴史の横断面を問題とするなかで社会関係ということが言われるので、社会関係と言う場合も大変慎重である。この点有賀喜左衛門とかなり違うと思う。ゲゼルシャフト化イコール近代化とは考えないわけで、地域的合意のもとに何らかの合理性をもつ社会関係はいかなるものかが問題とされてくる。この意味で鈴木は歴史の横断面を実践的に測定し歴史的变化の複数の可能性を読み取っていたのではないか。その一つの方向は自然村の解体↓ラーバン・コミュニティへの方向であり、もう一つは自然村の、合意にもとづく再編というか、鈴木という「更新の原理」による方向で、ムラの解体ないし展望を問題にする場合、鈴木がこのように歴史の可能性を追及していった意味を問題とすべきだろうと思う。